

## バーチャル咬合器を使用するためのアナログ知識

長谷川篤史

多くの技工操作がデジタルの作業に移り変わり、従来のアナログの技術がぼやけはじめていることが感じられる昨今、デジタル技工であろうとアナログ技工であろうと我々歯科技工士の役割の一つとして、患者の咀嚼や発音などの機能を阻害することなく生体（天然歯および下顎運動）に組み込まれる補綴装置を製作することが目標の一つだと考えている。これを達成するためには、アナログで培った顎関節（下顎運動）の理解や、各歯の解剖学的形態を深く理解することが必要なのではないのだろうか。デジタルだけに頼るのではなく、デジタルとアナログの技術を融合することでより良い補綴装置を製作することが大切だと考える。今回著者が考えるアナログ咬合器を使用するための基礎知識を述べさせていただきます、バーチャル咬合器への落とし込みについて述べさせていただきます。